

特筆すべき教育・研究・診療・社会貢献活動等への取組と成果，世界的位置付けなど。

(評価年次報告「卓越した教育研究大学へ向けて」で報告する内容)

< 特筆すべき教育活動 >

1. 高等教育フォーラム開催による継続的な高大接続事業
 高校教諭参加の高大接続を目指す第 10 回高等教育フォーラム「新時代の大学教育を考える 高大連携活動：学習意欲の喚起と大学への橋渡し - 大学体験型イベントの教育効果と大学入試 - 」を開催し、高校関係者 40 名を含む 122 名の参加があった。
2. 高大接続事業のアウトリーチプログラムの継続的な開催
 青森市文化会館において東北大学高等教育開発推進センターアウトリーチプログラム(3)「学んで何だろう？」を開催し、青森県内 5 校の公立高校の高校生、保護者、教員約 550 名の参加があった。
3. 入試広報活動の展開
 入試センターを中心に、「大学案内」の企画、作成、各種説明会(高校生対象の「進学説明会」7月東京会場 603 名参加、大阪会場 7 月 135 名参加。教員対象の「入試説明会」5~7 月、17 会場、366 名参加、うち仙台会場 207 名。高校訪問 26 校、等)、オープンキャンパスの全学的な企画・調整・支援(7 月、参加者 45,921 名)等を実施。こうした活動に対し、『大学ランキング 2011』(朝日新聞社)では高校からの評価「広報活動に熱心」という項目で前年に引き続き第 2 位にランクされた。
4. 新英語カリキュラムと TOEFL-ITP の実施
 本学における英語教育強化のために、1 科目当たり週 2 コマ受講する全学教育の新たな英語カリキュラムを平成 21 年度から実施し、全学部 1 年生を対象に TOEFL-ITP 受験を必修化する事業に中心的役割として貢献した。
5. 自然科学総合実験のアンケート改訂と実施
 自然科学総合実験において独自に行っているアンケート調査の内容を改訂し、実施した。その結果を直ちに授業に反映させ、学生の実験レポート執筆を支援するために図書館本館に「自然科学総合実験コーナー」の新設を依頼した。平成 22 年度からオープンし、順次、その内容を充実させていくことにした。
6. 理科実験の「出席・成績管理システム」を用いた学生支援
 自然科学総合実験で用いている「出席・成績管理システム」で得られた学生の出欠情報をもとに、学務審議会を通して学部が発信し、学生のドロップアウトを事前に予防する学生支援を行うシステムをスタートさせた。
7. 「アドバンスト・マスマティクスコース」等の継続的な開講
 東北大学の「出る杭を伸ばす」施策である学部の初期段階(2~3 セメスター)における課外授業として「アドバンスト・マスマティクスコース」を、学部生及び大学院生を対象とした課外授業として「プラクティカル・イングリッシュコース」を引き続き開設し、学生の勉学意欲の向上を実現した。
8. 日本人学生と留学生の共修授業を実施
 東北大学の教育の国際化、学生の国際化を目標とした新たな授業として、全学教育「基礎ゼミ」の授業を「外国人留学生等特別課程」の日本文化演習授業と合同開講の形で開講し、日本人学生と留学生がともに参加して意見交換や共同作業を行う共修授業を実施した。また、全学教育「カレント・トピックス」の授業を「外国人留学生等特別課程」の日本文化演習授業と合同開講の形で「国際共修ゼミ」として複数開講し、同様の共修授業を実施した。
9. 全学生を対象としたキャリア支援プログラムの企画・実施
 現在の社会環境および学生のニーズを踏まえ、キャリアデザイン方法、コミュニケーション力などの習得を目的とした支援プログラムを年間通じて実施している。延べ 8,000 名ほどの学生が

参加した。

10. 学生相談所による継続的な予防教育的活動

本学学生の学習の悩み、生活の悩み等を早期に発見して予防する教育活動が大学全体の教育研究活動に重要な要素となった現代を見極め、先導的取り組みとしてハラスメント及び自殺防止のための予防教育的活動を主催 FD 4 回、さらに部局による FD、学生ガイダンスにおいて講演等を実施した。

< 特筆すべき研究活動 >

1. 大学における「転換」教育の研究

2 つの特色 GP 事業を「学びの転換」の視点から総括し、学士課程教育全体の展望についても考察を加えた研究成果、『大学における「学びの転換」と学士課程教育の将来』（東北大学出版会、平成 22 年 3 月 25 日）を刊行し、全国の大学に向け発信した。

2. 「教育の成果」に関する研究

「学生による授業評価」とその活用に関する研究を進め、東北地域大学教育推進連絡会議の協力を得て東北地域各大学の実情調査を実施した。これらの成果を取りまとめて『学生による授業評価の現在』（東北大学出版会、平成 22 年 3 月 25 日）として刊行し、広く社会に向け発信した。

3. 学務審議会・東北大学院生調査の実施協力

学務審議会に設置された「大学院教育のあり方に関するワーキング」の調査活動に協力し、東北大学では初めての院生調査用紙の企画・設計を行い、分析結果を報告書にまとめた。報告書に基づいて、学務審議会では、引き続き大学院教育の改善について取り組むなど、東北大学の教育改善に貢献している。

4. 東北大学の入試改善に関わる研究

東北大学の入試改善に資するため、追跡調査に関わる研究、入試における調査書利用に関する研究、看護系大学の入試設計に関する研究、入学者選抜における発達障害者への対応状況の研究等を実施し、その成果をセンター紀要や本センター発行の報告書および全国入学者選抜研究連絡会議や学会等において公表した。

5. 理科実験科目を通じた教育連携研究

様々な大学における理科実験科目について、内容、実施システムや方法、科目の位置づけ等を調査・訪問し、教育における連携活動を模索した。その結果についてはセンター紀要に報告した。

6. オン・ライン CALL 教材の開発

インターネットを活用した英語教材はこれからの英語教育の新しい学習法として、質・量の両面で充実させていく必要がある。本センター英語教員がモンタナ大学、スタンフォード大学と共同で制作・開発したオン・ライン CALL 教材 Linc English は、既に本学および日本の数大学で使用されており、さらに「話す・書く」アウトプットの教材開発の研究と調査を開始した。

7. 大学における発達障害学生の修学支援体制構築に関する研究

大学において教育研究における問題となってきた高機能発達障害学生への対応を学術的に把握するため、総長裁量経費によって、教育学研究科と共同研究を行った。特に研究中心大学における発達障害学生の支援体制構築の研究に取り組んでおり、「東北大学における発達障害学生修学支援システムの構築」に関する報告書（発達障害学生修学支援研究会）を作成した。

8. アカデミック・ライティング教材の開発に関する研究

大学教育の国際化として、留学生がレポート、研究計画書、論文等を日本語で書く際に必要な学習事項を選定し、他大学の教員との共同研究で、アカデミック・ライティングの手引きとなる表現集『留学生と日本人学生のためのレポート・論文表現ハンドブック』（東京大学出版会、2009年）を刊行した。

9．学生健診時尿検体から得られる生活習慣病マーカーに関する研究

多くの学生を対象とする保健管理センターの特長を生かした研究として、既に増加傾向にある高血圧や慢性腎臓病などの生活習慣関連疾患に罹患した学生の早期診断法として酸化ストレスマーカーであるチオバルビツール酸反応性物質濃度やカルボニルストレスであるメチルグリオキサー濃度の測定が有用であることを明らかとした。

<特筆すべき社会貢献活動等>

1．当センターが掲げる「国際連携を活用した大学教育力開発の支援拠点」がFD・SDの中核拠点として教育関係共同利用拠点に平成22年3月、認定を受け、東北地域高等教育コンソーシアム会議、拠点発足シンポジウム開催等を通して、各大学の教育力向上に寄与する中軸的な拠点センターとしての活動を開始した。

2．東北地区国公立大学との継続的な連携事業

東北地区国公立大学との連携のもとに、平成21年度IDE大学セミナーとして第11回高等教育フォーラム「現代学生の発達課題と学習・生活支援」を開催し、88名の参加があった。

3．高大連携事業 SPP「コスモス理科実験講座」の継続的実施

宮城第一高等学校と連携しつつ、サイエンスパートナーシッププログラム（SPP）事業を通して「コスモス理科実験講座」を開催し、高校と大学の教育的接続の事業を継続的に展開した。

4．全国の大学のハラスメント相談員対象研修会の企画・開催

大学のハラスメント相談員対象の本格的研修会はその強いニーズがありながらも、問題の性質と専門家の少なさから、これまで存在していなかった。ハラスメント相談・対応に関して他大学を先導する役割を担っている本学がこれを企画し、継続開催することにしたもので、名古屋大学、広島大学等の参加を得て第1回目を開催した。

5．全国及び地域に根ざした学生生活支援事業への多彩な貢献

学生相談室の吉武教授が、日本学生支援機構の「学生生活支援事業のあり方に関する有識者会議」有識者委員・主査となり、全国の学生生活支援事業のあり方について中心的役割を担っている。また、学生相談室は継続的に、仙台学生相談事例研究会を主宰し、地域の大学のカウンセラー研鑽の機会を提供している。

6．健康科学セミナー・健康科学講演会の開催

本学の保健管理センタースタッフのみならず近隣の大学の保健管理室勤務のスタッフを対象にしたセミナーを5回実施した。また、本学の学生、職員を対象に平成21年度は「人間の安全保障と感染症 - 世界と日本のエイズ」の講演会を実施した。